スプラッシュ（一）
瑠璃の色

市川司幸

窓の外からビー玉売りの声がした。拡声器を使わない地声で、

「ビー玉はいかがですか、ビー玉。ビー玉はいかがですか」と張り上げる声が掠れていた。

友悟は、子どもがふざけてビー玉売りの真似をしているだけなのだろうと思ったが、窓を開けてみるとたしかにビー玉売りの屋台が家の前を通りかかろうとしていた。

ビー玉売りを見たのは幼いとき以来だった。豆腐売りや焼き芋売りの屋台は時折家の前を通ったが、ビー玉の屋台はしばらく見ていなかった。

ちょうど机上には小銭入れが乗っていた。仕事が煮詰まってくると、友悟は手慰みに小銭入れを揉んで音を鳴らしてみる癖があった。ビー玉売りの声を聞いて、ひとつくらい買ってみる気が起きた。友悟は小銭入れをポケットに入れて家の外に出た。

ビー玉売りを引き留めると、声質の印象よりがっしりとした体格の青年が振り返った。もうすこし幼い少年を友悟は想像していた。

屋台はおでんの屋台と見た目は変わっていなかったが、大根や玉子が煮えているところに色とりどりのビー玉がぎっしりと入っていた。屋根からぶら下がっている電球が風に揺れるたびに、ビー玉に射し込んだ光が屈折して、赤色や黄色や青色に眩しかった。

友悟はビー玉の山を指で探りながら、海色のビー玉をひとつ、そして棚に並んでいたポッピンのうち琥珀色のものを買った。

小銭を渡すとき、青年の手に小さいまめができているのを見た。きっとこれは本来親の仕事で、何か急の用で今日は子どもが屋台を引いているのだろう。小さいまめは、慣れない力仕事によるものに違いない。

「どうも、ありがとうございました」

青年は不愛想に言った。だがそれも、この時期の年齢に相応のように感じて、友悟はとくに嫌悪しなかった。

屋台はすぐに行ってしまった。友悟の家の前の小道をまっすぐ行くと、車の多い大通りに出る。屋台はこのあとどこに行くのだろうか。港のほうまで行くのだろうかと友悟は思った。

琥珀色のポッピンを吹くと、ガラスの音色でぽぴんぽぴんと鳴った。すぐそばの山王神社の桜の葉に夕陽が斜めにあたっていた。日が暮れるのも幾分か早まったようである。

家に戻ろうとしたとき、屋台が去ったほうから車のライトが近づいてきた。車は友悟の家の目の前で停まった。緑色のタクシーのドアが開いて、中から結良(ゆら)が出てきた。両手でキャリーバッグを抱えている。

「外に出ていたの？」と結良は言った。

「家の前にビー玉売りが来ていたんだ。屋台のやつだよ。このへんだとビー玉売りはなかなか見ないからね」

友悟は結良のキャリーバッグを代わりに持ってやった。

「ビー玉売りなんてまだいるのね。おでんとか焼き芋ならたまに見るけれど、ビー玉売りは珍しいね」

運転席から初老のタクシー・ドライバーが出てきて、後部座席を見回してから

「忘れ物はございませんね？」と言った。結良が頷くと、ドライバーも会釈してすぐに行ってしまった。

家に入ってから、結良は先に風呂に入った。ちょうどさっき湧いたところだった。結良が長い湯に浸かっている間、友悟はポトフを煮た。煮えるのを待っているあいだ、何度かポッピンを吹いた。やがて変わらない音に飽きてくると、ポッピンの先端をつまんでくるくる回して

みた。ガラスの中に波のような模様が入っていて、まるで蜜が波打っているようだった。
湯上りの結良が台所に来て、
「それ何？」と尋ねた。
「さっき言ったビー玉売りのとこで買ったんだよ。こうしてくるくる回してみると、模様が波みたいに見えて綺麗だよ」
結良もポッピンを回した。初めて眼鏡をかけた子どものような顔をした。
夕食をとっているとき、コップを持ってくるついでに友悟はあのビー玉が入った紙袋を一緒に持って来た。
「これは結良に買ってきたんだけど」
海色の小さい球を、結良は両手で大事そうに受けた。銀色の匙を置いて、人差し指と親指でつまんだ。「綺麗」と結良は漏らした。
「わたしこの色大好きなのよ。よくこの色を選んだね」
「だって結良は海っぽいものは何でも好きじゃないか。ネックレスだって、筆箱だってそうだ。よっぽど海の色が好きなんだね」
「わたし海好きだよ。さみしいときにはひとりで海の泡になりたいって思うの」
「ひとりはさみしくない？　魚とかはいなくていいの？」
「だって魚はわたしひとりで十分だもの」
テレビでは昨日の夜に死んだコメディアンのニュースが流れていた。入院していた病院の階段から転落し、頭を打ったとのことだった。コメンテーターたちはコメディアンの往年の姿を振り返っていた。普段、ニュースは聞き流す程度の友悟も、顔を向けてテレビを見ていた。
「頭を打って死ぬときって、痛みを感じるまえに死んじゃうのかな」
結良が突然尋ねるので、友悟は困った。
「頭を打ったって言っても、即死ってわけにはいかないんじゃないかな」
「そういうものなのかな」
結良はそう言うとフォークでポトフのウインナーを口に運んだ。食事の間、結良はテーブル板の模様を見つめているばかりで、何か考え事をしているように見えた。友悟はその靄のような視線に不吉なものを感じた。ふいに結良がまぶたを友悟のほうに向けて、友悟はあわててテレビのほうを見た。
結良が家に戻ってくるのは六日ぶりだった。疲れていたのか、夕食が終わると結良はすぐに眠ってしまった。荷ほどきの済んでいないキャリーバッグが玄関に残されたままだった。友悟は衣類だけをバッグから出して洗濯にかけたが、それ以外のものには手を付けないで、そのまま彼女のいる寝室に運んでやった。
寝室にはベッドがひとつあって、そこは結良が眠るためのものだった。結良と同棲のような生活をするようになってから、友悟は自室にもうひとつベッドを置いたのだった。
結良に帰る家を用意するようになってから、もうすぐ三年が経つ。
洗濯が済んで、風呂場の湯を抜こうとしたとき、友悟はポトフを食べていた結良の不安定な目を思い出した。湯が全部流れ切ったあと、友悟はあとで浴槽に水を張っておこうと思った。
翌日、早朝の廊下を歩くと足の裏がぴしぴしと鳴るように感じるのは、空気が冷たくなったからなのだろうか。夏の朝には感じることのなかった感覚だった。
熱いコーヒーを淹れて、まだ薄暗いダイニングテーブルで啜った。眩しいので電気は点けなかった。起き抜けのラジオが七十年代の邦楽を流した。友悟が生まれる何十年も前の曲だが、時々無性に聴きたくなるときがある。自室の棚にも何枚かあっただろうか。
二杯目のコーヒーを淹れたとき、二階の寝室からぼんぼんと揺れるような音が始まった。天井がかすかに揺れているようにも見えた。
友悟はカップを置いて、急いで二階に上がった。寝室の扉を開けて、ベッドの上で何かが跳ねているのが見えた。掛け布団にくるまって中身は見えなかったが、友悟はもう理解していた。布団を引き剥がすと、大きな魚が横たわっていた。青い魚だった。
友悟は魚を両手で抱えて、階下の浴室に向かった。魚は友悟の腕の中で激しく尾鰭を動かして抵抗した。そして闇のように真っ黒な瞳で友悟の顔を見つめた。
魚の眼は睨まない。見つめる強さで意思を伝えようとする。
浴槽には昨晩のうちに溜めておいた水で満ちていた。その中に魚をざんぶと滑り込ませると、驚いたのか、いっそう強くヒレを動かして暴れた。友悟のシャツに飛沫がかかって濡れた。
魚が浴槽の底を蹴って出ようとするのを、蓋で抑えた。強い力で、抑える友悟の力も押しのけんとしたが、しばらくすると力を使い果たしたらしくおとなしくなった。
狭く窮屈な浴槽の水にも慣れていたようだった。魚は尾鰭の先を小さく揺らしながら、口を開けたり閉じたりしていた。魚が体を揺らすたびに、浴槽から水がわずかにこぼれた。
もう魚が暴れそうにないことがわかると、友悟はびしょ濡れになったシャツを着替えて、それから洗面所に飛

び散った水をタオルで拭いた。魚はおとなしくしていた。二階からの音を耳にしてから、五分は経過しているだろうと思われた。
床を拭いて、壁を拭いて、そうしてもう一度浴槽の中を覗いてみると、魚の胸鰭はほとんど人間の手に戻っていた。指先が戻ってしまえば全身がもとに戻るまで時間はかからない。鱗はみるみる肌理の細かい肌に色づいていく。浴槽の水が、さざ波のように寄せて来るたびに、魚は結良になっていった。
友悟は裸の結良が浴槽に眠っている姿を、赤ん坊がゆりかごの中で眠っているようだと思った。水の中から島のように顔を出している右肩を揺すぶった。
結良は眠たそうに眼を開けた。差し出された友悟の肩を借りて、今にも転びそうな足取りで浴槽を出た。
友悟は結良の濡れた体を拭き、下着を着せてやった。結良は立ってはいたが、眠っているのとほとんど変わらなかった。生糸のような意識が辛うじて彼女の体を支えていた。それがいつ秋の風に千切れてもおかしくなかった。
壁掛け時計は六時を少し過ぎていた。
「結良、今朝の六時だけれど、まだ寝る？　それともう起きちゃう？」
洗面所の壁をぼんやり見つめながら、結良は小さく「うん」と呟いた。
友悟の背中に負われて寝室へ戻ろうとする頃には、結良はすっかり眠りに落ちてしまっていて、呼びかけても答えなかった。
寝室のドアを閉めるとき、ベッドの上できゅっと枕の端を掴む結良を眺めながら、ふと、結良が魚になっているときに人間の夢を見るのか、それとも魚になって海を泳ぐ夢を見ているのか気になった。ただ、ころんころんと寝返りをうつ様子からは、どうも魚になっているらしかった。
友悟はぬるくなったコーヒーと、バタートーストを食べた。
さっきラジオから流れてきた曲の入っているＣＤを自室から持ってきて、窓際で聴いた。狭い庭には昨日咲いたコスモスが花をこちらに向けていた。
ヘッドホンを外した。暑さも落ち着いて、庭全体も静かになったようである。南からのそよ風が立てる音も聞こえるほどだった。
ＣＤの最後の曲が終わり、もう一度最初からかけ直そうとしているとき、二階から結良が降りてきた。
「ねえ、わたし魚になってた？」
「うん、なってたよ」
「下着がね、青色になっていたから。昨日着たのは白いのだった」
結良は昨日のポトフの残りを温めて食べ始めた。パンは食べないのか訊くと、お腹がそんなに空いていないと言った。
「大変でしょ、魚になったとき。いつもごめんね」
「仕方ないことじゃないか。結良の意思でどうこうできる魚じゃないんだから。それに、結良が魚になるのを前提に一緒に住んでいるんだからさ。気にする必要はないよ。最近は僕もいくらか手際が良くなってきたんだ」
「そうだけど…」
「魚になってる時のことは覚えていないんだろう？」
「うん、なんにも覚えてないよ」
「結良はね、ベッドの上でもよく動くけど、浴槽の中に入ったときのほうがもっと動くんだよ。こう、ばしゃばしゃってね」
友悟が大げさに魚の跳ねる真似をすると、結良は吹き出した。友悟はすこし安堵して、しばらくその動きを続けた。
それから友悟も結良も、一杯ずつコーヒーを飲んだ。
「今日はずっと家にいるの？」
「うん、今日は家にいるつもりだよ」
「どこか行く？　晴れてるから、富士川の河川敷にでも行けば少年野球をやってるよ。このまえ見たいって言ってなかったっけ」
「言った言った。でも仕事は大丈夫なの？」
「やらなきゃいけない仕事は平日中に片付けたから大丈夫だよ」
白い小型車の助手席に結良を乗せた。
国道一号線に乗って、真っ直ぐ道なりに走った。向かいの方向に風が吹いていた。日曜日で車は多かったが、友悟の車は止まることなくスムーズに走った。結良が助手席の窓を開けると、風が回転しながら吹き込んで友悟の髪の毛が立った。結良の黒髪はもっとひどかった。髪が流れて顔に被さっていた。
矢野頭子の曲の一節を口ずさんだとき、友悟の車の上を白い紙飛行機が飛んで行った。結良が指をさした。飛行機はずいぶんと飛んでいるようで、飛び方もふらふらしていた。友悟はその紙飛行機が、何か逃げられない運命に向かって飛んでいるように見えた。
工場地帯を通過すると辺りは開けて、幅の広い河川が二つ現れた。河川には橋が架かって、国道が通っていた。川の両側には河川敷が広がっている。河川敷の野球場では、小学生たちが小粒になって動き回っているのが見え

る。
駐車場に車を停めて、河川敷を囲む堤防に登った。グラウンドが一望できた。
友悟と結良は、ちょうど三回裏が始まったばかりの試合を眺めた。背番号三番の、比較的体つきの良い打者だった。
二球連続で見逃したあと、ファールからボールカウントでツーボールツーストライク、外角高めを打ち返した。打球は高く打ちあがった。深く守っていた小柄なライトの、ちょうど真正面に飛んだ。打者は一塁の手前で早くも走る速度を緩めていた。
しかし、ライトは打球を取り損ねた。グラブのどこに当たったのかは見えなかったが、打球はグラブに弾かれて、ぽんと前に転がった。打者は緩んだ足を飛ばして、すぐに二塁へ走った。ライトの送球が逸れて、結局三塁打になってしまった。
攻撃側のチームが湧き、守備側は静まった。ベンチから監督らしい男が出てきて、捕りこぼしたライトはベンチに下げられた。ベンチに走っていく彼の肩が震えているのが、友悟にはわかった。
「あのライト、泣いちゃったね。捕らなきゃいけない打球だっただけに、悔しいだろうな」
「わたしだって泣いちゃうよ。ぜったい泣くと思う」
富士川に架かった鉄橋をダンプカーが走った。山の崩れるような音が響いた。
再びライトに打球が飛んだ。先ほどの打球よりも飛距離があったが、代わった選手は後退しながら捕球した。手慣れた動作だった。
攻守が交代している間、結良は姿勢を崩して、青地に流れていく雲をぼうっと目で追っていた。結良は何か物思いに耽っているとき、必ず何かをぼんやり見つめる癖があった。浮雲を眺めながら、今も結良は何かを考えているのだろう。
結良が魚に変身するのは、何か悩みを抱えているときだというのは、友悟がこの数年で自然に得た知識だった。昨晩も眠りにつく前に、きっと考え事をしたのだろう。
「また、何かあったの？」
友悟が訊くと、結良は明らかに動揺した。隙を突かれたというような表情だった。結良が戸惑っているので「何曜日のこと？」と質問を変えてみた。今度は視線をグラウンドに向けたままで訊いた。結良は「金曜日」と言った。
「気持ち良くないって言われた。いろいろしたんだけど、何やっても気持ちよくないって。お金はあげるから、今夜はもう帰ってほしいって言われて、わたし金曜はカプセルホテルに泊まったの。泣いたよ。」
「そっか―でも、世界中の男が結良と相性が合うわけじゃないでしょ？　他の日は普通にいったの？」
「うん、他の人とは上手くいったよ。でもね、あの人すごく不機嫌になってたから」
「それはもう仕方ないことだよ。結良だって好きなものと嫌いなものがあるでしょ、ぜんぶがぜんぶ好きなんてことは、誰にも無いんだからさ」
「そうだよね。自分でもそうは思うんだけど、誰か同じ考えの人がいないと不安になってくるの。友悟はこういう気持ち、わかる？」
「わかるよ」と言ったあとで、何か足りないような気がして「何となく」と友悟は付け足した。結良の不安は、友悟が普段感じている漠然としたものとは異なっていることをわかっていた。
今夜も結良は魚になるのだろうか。昨日のように、浴槽に水を張っておいたほうがいいかもしれない。
試合はあの子がいるチームが負けた。五回の裏で二点を入れたが、結局あのエラーが入った点が決勝点になった形だった。相手チームは早々と片付けを済ませてグラウンドを後にしたが、負けたチームはその後も残って守備練習をしていた。
友悟の目線はあのライトに向けられていた。結局彼は練習でも捕りこぼしをし、そのたびに背中を向けて守備位置に戻っていった。赤く燃えて傾く陽はいかにも秋の訪れといったところだった。
家に帰って夕食と風呂を済ませた。
結良は寝室で過ごしていた。友悟が洗濯物を干しに行ったときにはまだ明かりが点いていた。きっと、ベッドに横になりながら来週夜をともにする男を探しているのだろうと、友悟は思った。
友悟と結良が土日だけ同じ家で生活するようになるまえから、結良は顔も知らない男と寝ることで孤独を鎮めていた。この習慣になる以前は、一日置きに魚になっていたということを、友悟は結良から聞いた。それが本当のことかはわからない。
ただ、結良と同棲を始めたばかりの頃に比べて、幾分か結良の表情が良くなったのは友悟も気づいていた。あの習慣が始まったばかりの頃に友悟は結良の面倒を見るようになったが、たしかに結良が魚に変身する頻度も減っている。ここのところ、平日はすべて男たちのもとに行くようになった。週に一日しか帰ってこないこともある。平日にため込んだ些細な不安の束を、友悟といるときに吐き出しているのだろう。
浴槽に水を溜めてから、自室に戻った友悟は、昨日買

ったポッピンを手に取ってみた。すこし鳴らした。ガラス特有の音が細い煙のように浮かんだ。
ふと結良にあげたビー玉のことを思った。結良の心もまた、あのビー玉のように受けた光をすべて受け止めてしまうのだろうと思った。友悟の心が捉えきれない光の機微を、結良は敏感に感じて、あの青い魚に変身しているのだ。
友悟は結良の瑠璃の心を哀れんだが、その美しさに魅せられてもいた。
ビー玉売りは今夜も屋台を引いているのだろうか。
翌朝、友悟が目を覚ましたときには結良は家を後にしていた。魚にならなかったらしい。結良が眠っていた寝室のカーテンはすべて開け放たれ、九月の陽光が布団を膨らませていた。

金曜日に結良から連絡がきた。
高校時代の友人に会うらしく、土日も帰ってこないとのことだった。友悟はとくに思うこともなく返信をした。
土曜日は、午前中に少し残っていた仕事を片付け、午後に映画を見に行った。友悟は普段は映画を見に行くことはほとんどなかった。会社の同僚から貰った割引券があったので、見に行ったというだけだった。
沼津駅北口を出てすぐの映画館に行った。同僚が言うには、話題の作品なのだという。友悟は映画だけでなく、流行りのものに疎い。映画にしろ音楽にしろ服にしろ、何でも流行りのものを味わおうとする同僚は、よく友悟を「若年寄り」と呼ぶが、友悟も自分の嗜好がいくらか時代遅れだという認識はあった。しかし、それに引け目を感じるということもなかった。
その映画がアニメーションだというのに友悟は面食らった感じがしたが、それでも筋立てはおもしろかった。たまにこういうのを見るのも良いように思った。
映画館の自動販売機には、早くも汁粉が出ていた。汁粉の季節というには、さすがに今日の日差しは強かった。
家に帰ると結良から写真が送られてきていた。カフェにいるらしく、コーヒーとチーズケーキが映っていた。画面には結良と友人のピースサインが入っていた。結良の指は友人のものに比べ白く見えた。
友悟はなんとなく、自分も喫茶店に行きたいと思った。
結良がいれば、二人で喫茶店のコーヒーを飲めるのだが、あいにく今週は帰ってこない。時々お茶をする旧友に連絡をとった。
女の友人で、彼女もまた沼津に住んでいた。保育士をする傍ら、趣味で絵本を書いている。友悟とは高校時代に親しくなった。
以前、土曜日も土曜保育があると話していたから、返事をゆったりと待つつもりだったが、思ったよりも早く帰ってきた。今日は何もないからすぐに会えるとのことだったが、友悟は日曜日にしようと言った。既に午後の三時になろうとしていた。コーヒーを飲みながら話すならば、長く話せたほうがいい。
結良とよく行く、駅前商店街の喫茶店で待ち合わせをした。
友悟は少し早めに家を出た。喫茶店の目と鼻の先に大きな本屋がある。沼津では最も大きい三階建ての本屋で、友悟は一階の文庫の棚や、画集の棚をふらつきながら、面白そうなものを手に取っては、ぱらぱらめくった。時々買う音楽雑誌に大瀧詠一が特集されていたので買った。
喫茶店に入ったのは約束の五分前だったが、窓辺の席にすでに彼女が座っていた。友悟は雑誌を片手に席についた。
「いつから待ってるの、梨花(りか)？」
「さっき来たばかりだけど」
「このまえそう言って、ほんとうは十五分前に着いていたじゃないか」
「でも今日は本当にさっき着いたの」
梨花も文庫本を読んでいた。友悟が興味深そうに表紙を覗くと、梨花は表紙を見せて「方丈記」と言った。
梨花はブレンドコーヒーを、友悟はアイスコーヒーを頼んだ。店員が一緒にケーキを勧めてきたので、二人ともチョコレートケーキも注文した。
ちょうど昼時で、商店街も賑やかになってきた。新しい客が続々と喫茶店に入ってきた。この喫茶店のランチは、二段の弁当箱に日替わりのおかずが入っているという変わったもので、それを目当てにやってくる客も多いのである。
互いの近況を話しながら、運ばれてきたコーヒーを啜り、ケーキにフォークを入れた。梨花は今度、初めての絵本を出版するつもりだと言った。以前お茶をしたときに、もうすぐ完成しそうだと言っていた本が、関係者に好評だったらしい。
「どこの出版社から出すんだ？」
「静岡の出版社。あまり大きくはないけれど、自分の描いたものが出版されるのは初めてだから、どの出版社でも嬉しい」
「出版はもうすぐなの？」
「どうだろうね。まだ決まってない。今年中はたぶん無理だと思うけど」
「とりあえず、出版おめでとう」
「ありがとう。ところで、同棲している人とはどうなの？

上手くいってるの？」
友悟は結良との関係について、梨花には「交際していて、同棲している」と言ってあった。実際は付き合っているわけではなかったが、背景にあることを細かく説明するのは難しかった。交際しているということにしておけば、とりあえず納得された。
「そんなに進展はないよ。普通の同棲生活を送っているだけ」
「喧嘩とかトラブルはないの？」
梨花の射通すような視線に、友悟は嘘を見抜かれたのかと思った。梨花は昔から、話し相手の眼をずっと見つめる癖があった。瞳は黒の中に一点の白を垂らしたようで、その白がまっすぐに向けられるのである。友悟はその眼で見つめられるたび、仮面の端に指をかけられて剥がされているような心持がするのだった。
「喧嘩はしないな。言い争うこともない」
梨花は、そう、と言ってカップの中をからにした。それ以上踏み込んでは来なかった。友悟は安心したように通りの雑踏に視線をそらした。
「このまえ三島に行ったんだよ。文教町の銀杏並木がもうすぐ色づきそうだから、もうすこししたら彼女さんとふたりで行ってみたら？　あなたそういうの好きでしょう、花とか紅葉とか、あと海とか」
「好きだよ。自然を眺めていると、会社勤めで溜めた毒気が浄化されていくような気がするんだ。けっこう大変なんだよ、会社勤めもね。保育士のほうが大変かもしれないけれど」
「保育士は楽しいよ。大変なこともちろんあるけれど、あまりストレスには感じないかもしれない。教室の飾りを作ったりするの楽しいし、子どもと遊ぶのも、良い運動になるしね」
「うちの会社にも無邪気な子どもがいてくれたら、いくらか癒されるかもしれないね」
「子どもはいいよ。純粋だから。私はあなたみたいに、毎日ただ働くことに耐えられない」
「それは皮肉？」
「皮肉じゃない。あなたは私にできないことを難なくやっているって言いたいだけ」
友悟が梨花の視線をおそれるのは、友悟が日頃見ずにいようと努めているものを、容赦なく見つめてくるのも理由にあるかもしれない。時々その視線は、友悟を不快にさせた。友悟は瞬きをした。
友悟は梨花と別れ、商店街を端から端まで一通り巡った。シャッターの閉まっている店や、友悟に馴染みのない、新しい店が明らかに増えていた。
商店街は海に向かって体を伸ばしている。消えた店、消えた商品、消えた人々はどこに行ったのだろうか。冷酷な現実を好まない友悟は、ようやく青になった交叉点を渡りながら、寄せては引いていく波の音に誘われて、荷物を背負いながら裸足で海に入っていく人々の列を想像した。

友悟が会社から家に戻ると、家の明かりが点いていた。友悟は家を出る前に電気を消し忘れたのだと思ったが、家の鍵も開いていた。盗みに入られたのではないかと疑った。
忍ぶように家の中に入っていくと、部屋を荒らされたような気配もなく、泥棒もいなかった。リビングの隅にキャリーバッグが立てかけられていた。ソファーの肘掛にもたれかかるようにして、結良が座っていた。眠りそうな眼で友悟のほうを見つめて、「おかえり、友悟」と言った。キッチンの蛇口から水滴が落ちた。
「今日は水曜日だよ。帰ってきたの？」
「なんか疲れちゃったの。今日はちょっと、誰かと会う気力ない」
風呂は沸いていなかった。薬缶も鍋も、流し台も、友悟が家を出たときと全く変わっていなかった。結良は帰ってから何もしていないのだろうか。
「とりあえず、なんか作るよ。味噌汁と、おにぎりでいい？」
「いらない。お腹すいてないから」
「どこかで食べてきたの？」
結良は答えなかった。隣の家から、子どもが笑う声が聞こえてきた。隣家の夫婦には子どもが二人いたはずだ。しかし聞こえてきた声はひとりの声のようだった。
豆腐だけの味噌汁と、昨日冷凍したごはんで作ったおにぎりを食べた。何も話さなかった。あまりに静かなので友悟がテレビを点けたが、クイズ番組は二人の間の沈黙を一層際立たせるだけだった。
「結良、明日は家にいるの？」
結良はうなずくことも、首を横に振ることもしなかった。おにぎりを咀嚼しながら、窓のほうをぼんやりと眺めている。葛藤しているというよりは、ほんとうに予定が決まっていないのだろうと友悟は思った。
「港に行こうか。歩いて。明日は会社休むからさ、二人で港行こうよ。それで何か美味しいものがあったら、食べよう」
「会社休んでいいの？」
「高校のときからよく仮病つかってたから、さぼるのは得意なんだ。それにちょうど休みたいと思ってたところ

だしさ」
「会社休んじゃだめだよ。わたしなんかに構わなくていいから」
「違うって。べつにそういうわけじゃないよ」
「いいから」
結良の眼が真っ直ぐ友悟に向けられた。そしてその眼から、ぼろぼろと涙があふれてきた。水の中で眼を開いたときに見る景色のように、結良の瞳の奥の黒いものが、涙で揺らめくのを友悟は見た。瞳孔は揺らいでいたが、色は間違いなくはっきりとしていた。友悟は抗議めいたものを感じた。
糸はすぐに緩んだ。結良はソファーの肘掛に顔を埋めて、声を上げた。友悟は結良の隣に座って、その背中をさすった。さするたびに背中が波打って、汲み上げられたように涙と声とがあふれて出た。
あの一瞬の視線の裏には、いったい何があるのだろうか。もしもあの視線が抗議を意味しているとしたら、いったい誰に向けての抗議なのだろう。彼女は彼女自身に抗議していたのかもしれない。哀しいほど細く繊細で、他者のあらゆる感情を自分の行動に結びつける彼女ならば、きっとそのように考えるだろう。
その夜は同じベッドで眠った。結良は眠れないようで、何度も寝返りを打った。友悟もまた、眠れなかった。
結良が左へ寝返って、友悟の胸の中に包まれるようなかたちになった。結良の指がイソギンチャクのように友悟の下腹部に触れた。友悟は右手でそれを押さえた。
「そういう関係じゃないでしょ」
友悟が独り言のように呟くと、結良はすぐに指を引いた。
「キスしていい？」
結良が顔を近づけて、そのまま唇を重ねた。友悟は瞼を閉じたままでいた。そこが波打ち際だった。聞こえるはずのない潮の音が、耳の遠く奥から聞こえた。
「やっぱり明日、港に行こうよ」
結良は何も言わなかった。涙も流さなかった。

港大橋を渡ると、傍を通り過ぎるトラックの数も増えて、いよいよ沼津港にやってきたという感じがした。潮の香りがしたが、どうやら狩野川の匂いのようである。
休日は海産物を求める人々で賑わう沼津港も、平日は閑散としているだろうと友悟は想像したが、行ってみると、休日ほどではないにしろ、通りを歩く人がいた。漁師の服装には見えなかったから、休みをとって遊びにやってきた人間なのかもしれない。水族館の前には、親子連れが歩いていた。
道の両側に倉庫やら土産物屋やらが押し合いへし合いしていた。車がよく通るので、友悟が先に、結良が後になって歩いた。今朝水揚げされた魚の匂いがした。
友悟はこの匂いを嗅ぐたびに、なにか懐かしい感じがした。具体的な記憶は引っ張り出せないのだが、どこかしらに針が引っかかっているらしい。
結良が立ち止まった。魚屋の店先に、太刀魚が出ていた。その隣には赤い魚がいた。
「この魚、何て魚だっけ」
店の奥にいた主人が腰を曲げて出てきて、
「ホウボウって言うのさ」と言った。口から煙草の匂いがした。
「ホウボウはね、刺身にするのも美味いんだが、おれは刺身よりも煮つけのほうが好きなんだ。醤油と酒と砂糖とでね、ようく煮てやると、ごはんに合う良いおかずになるんだ。今が旬だよ」
「へえ」
せっかくだから買っていこうかと思ったが、まだしばらく家に帰るつもりはなかった。
「また今度買いに来ようか。今日は歩いてきたから、家に帰るまでにだめになっちゃうかもしれない。せっかく美味しい魚は、すぐ家に帰って冷蔵庫に入れてあげたほうがいいだろう」
「今度の土日、魚の煮つけが食べたい。ホウボウじゃなくてもいいけれど」
「わかった。用意しておくよ」
市場の多い地域を一通りまわって、さらに西へ進むと水門が近づいて見えてくる。港大橋を渡るときにも見えてはいたが、富士見橋を越えると、改めてその大きさが際立つ。林は公園になっている。遊歩道の途中には杉原千畝や本居長世の碑が置かれている。結良は碑を見つけるたびに立ち止まって、静かに碑銘を読んだ。しゃがむ結良を、友悟が上から見下ろす形となる。さながら父と娘のようにも見える。
公園から千本浜へは、文学通りを歩いていけば時間がかからない。車の通りが少なく、道の途中には日本式の邸宅がいくつもある。その家々の屋根を、松の木が覆っているのである。若山牧水もこの辺りに住んでいたのだと、友悟は学生時代に教えられたが、友悟は二十五歳になって尚、最も有名な、「白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけり」しか知らなかった。
秋にしては日差しが強かっただけに、松の木陰の涼しさが一層沁みた。友悟が手の甲で額の汗を拭うと、結良がカバンから真っ白なハンカチを差し出した。酒は飲んでいないが、友悟も結良もうっすら頬を赤くした。

防波堤に隠された浜が一気にひらけて現れた。結良は思わず声を上げた。
浜は湾曲して、公園の前からぐんと伸びて富士のほうまで続いていた。浜に寄りそうように、松林も長く続いている。
千本浜は砂浜ではなく、砂利浜である。浜一杯に大小の砂利が敷き詰められている。防波堤に座って眺めると、海の薄ら青と空の真っ青、松の緑とで銀色の砂子のようである。友悟はビー玉売りの屋台いっぱいのビー玉を思い浮かべた。
友悟と結良は、防波堤に腰を掛けたまま、水筒の麦茶を飲んだ。蓋がコップの代わりになっていて、片方が酌み、もう片方が飲んで、今度は酌んでを繰り返した。
浜は静かだった。まばらに人はいるものの、ほとんど自然の音しか聞こえてこない。浜に眼を向けて、波や林の震える音、上空を旋回するとんびの声に耳を傾けるだけで、じんわりと浄化されていくようだった。
ふいに結良が口を開いた。
「ねえ、もしもわたしが魚になって、そのまま海の中を泳いでいったとしたら、どこまで行けるかな」
友悟はどう答えればいいのかわからなかったが、結良の表情は決して暗くはなかった。不安などをすべて置いて、ただ純粋に空想をしているらしい。
「三津のほうまで行けるかな」
「どうだろう。でも魚になったときの結良は元気が良いからな。三津を通り越して、尾瀬崎のほうまで行けるかもしれないよ」
「そんなに元気がいいの？」結良は笑った。
「普段のわたしはそんなに走れないし、あまりアクティブじゃないのに、魚になったら途端に元気いっぱいになるんだね」
「僕だって魚になったらすごい速く泳げるかもしれない。学生のときはさ、走るのはいちばん遅かったのに、平泳ぎだけはすごく速かったから、どんな魚よりも速いかもしれない」
「そういえば友悟、平泳ぎ速かったね！　わたし覚えてるよ。陸上部の人よりも速くてびっくりしたの覚えてるもん」
「よく覚えてるね。そういえば陸上部のやつに勝った気がする」
防波堤を下りて、波打ち際まで歩いた。流木の傍に靴を置いて、裸足で砂利浜を歩いた。砂利は角が丸くなっていて踏んでも何ともなかったが、時々細い枝が落ちていた。
水が冷たかった。結良はひゃっと高い声を上げた。
「大げさだなあ」と友悟も入ってみると、結良と同じような声が出た。結良が手を叩いて笑った。
昨晩の翳りはもはやどこにもないようだった。ただ水との戯れを楽しんでいるらしかった。

続